

結びの言葉

以上拙文を以て纏述し來つた著者今日に至る迄の想ひ出の數々は拙文故に盡きぬ感が深い、尚ほ色々述べたい事もあるがあまりに長くなつては讀んで下さる諸士に對しても相済みぬ次第であるが、巻後回顧する時、著者の半生は全く幾變遷を経てゐる、そしてそれが國家材界に及ばした功罪に至つては、著者自信が省ふ苦難の過去に比して何等とり立てて云ふべきものなく、唯々自己の力と學識の足らざらしきを憾むのみである。

然し著者半生の人生行路難の諸相は巻頭に述べた如く、これから伸び伸びとした人世の春に逢ひ、豫測する事の出来ない苦しい山阪を幾度か經て行かねばならぬ若い人々が過ちを避けて中庸の道を進むべき好参考となり、刻苦精勵大成される楔にともならば望外の喜びとする處である。

以上蕪辭を連ねて結語とす。

昭和十二年六月

附録

香港・中南支遊行記

私は一兩年前から香港、中南支地方へ旅行をしたいと思つてゐたが仲々機會に恵まれず漸く店務其他公職關係に餘暇を得て昭和十二年五月廿二日午前八時十五分關西線で名古屋を出發した、大した旅行でもないでござり出掛けるつもりであつたが、驛頭には親戚、知友三十名餘りの見送りを受けて仲々賑やかだつたし、畏友神野鑛逸君が音頭取りて萬歲々と壯途を祝つて下さつたので思はず顔が熱つて同時にわけもなく目頭らが熱くなつた。

乗船豫約の加茂丸（郵船濠洲航路船）は名古屋、大阪、神戸と經て長崎を廿四日に發つのでその都合上私は大阪、神戸で商用を濟し廿四日長崎へ到着したのであるが、船の豫定が一日遅れたゝめ長崎で一泊して、廿五日市内を見物旁々長途の一路平安を祈る爲、諏訪神社に參詣して御祈禱を受けた、祈禱の先客があつたので待合す裡に刻々乗船時間が切迫する、終へて早速自動車で波止場へ駈けつけてみると出帆の銅鑼が鳴つてゐる、取るものも取りあへず解で本船へ急ぎブリッチを駈け登つて豫約の一等室へ落ち着いた、そこで失